

## 諸法実相抄

いかにも、今度信心をいたして法華經の行者にてとをり、日蓮が一門となりとをし給ふべし。日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか。地涌の菩薩にさだまりなば釈尊久遠の弟子たる事めに疑はんや。經に云はく「我久遠より来是等の衆を教化す」とは是なり。末法にして妙法蓮華經の五字を弘めん者は男女はきらふべからず、皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり。日蓮一人はじめは南無妙法蓮華經と唱へしが、二人三人百人と次第に唱へつたふるなり。未来も又しかるべし。是めに地涌の義にあらずや。剩へ広宣流布の時は日本一同に南無妙法蓮華經と唱へん事は大地を的とするなるべし。ともかくも法華經に名をたて身をまかせ給ふべし。 六六六頁

本日は五月度のお経日に当たりまして皆様方々お申し出のお塔婆を建立し只今は皆様方と共に読経唱題し御報恩申し上げた次第であります。

ところで釈尊は法華經を説き終わられて其の後に涅槃經を説かれて涅槃に入られていますがその最後に説かれた涅槃經に説かれている最勝、最上の人となるための八つの徳目と題しまして本日は御法話を申し上げたいと思います。

涅槃經の梵行品に「菩薩に八つの善法あり」（国訳涅槃部一―三二二）と言う事が説かれていますが、即ちこれは、最勝、最上の人となるための八つの徳目（人の良い行いや徳を分類した細目）が挙げられているのです。そこで、大聖人様の御指南を通して、この八つの徳目について考えてみたいと思います。それは、

第一には「信」即ち「信心」と言う事。

つまり「信ずる者を以つて善と為し不信の者を以つて不善と為す」と言うのであります。又、大聖人は念仏無間地獄抄（三八頁）に「信は道の源 功德の母」と説かれておられますが、正しい信心は「成仏・得脱」の大本と、「妙覺の種子」であり、「煩惱即菩提・生死即涅槃・娑婆即寂光」、「變毒為藥・転重軽受」、「諸願の成就と病即消滅・不老不死」等々、数え挙げればきりがありませんが、こうした功德の全ては、妙法の根本たる妙法独自の境界であります。その反対に「謗法・不信」は墮地獄の根源であります。

法華經の涌出品（開結・四九三頁）には「疑を生じて信ぜざること有らん者は即ち当に惡道に墮つべし」と説かれており、大聖人様は持妙法華問答抄（二九六頁）に「不信の者は墮在泥梨の根元なり。されば經には『疑ひを生じて信ぜざらん者は則ち當に惡道に墮つべし』と説かれたり。」と仰せられています。「墮在」とは地獄の事であります。謗法不信の人々は「法食」が無く、正法の功德に飢えたる人と言う意味で、涅槃經（国訳涅槃部一―四五）には「無上の財宝に貧しく」その「仏性を見ざる者を煩惱の身、雑食の身と名づく」と説かれています。つまり信心のない人を、八万四千の煩惱に汚

れた身、「不淨の人」と言い、謗法の人々を邪法の毒にさいなまされた雑食の身、即ち「毒氣深入の人」と名づくとの経文の意です。更に竜樹菩薩の十住毘婆沙論（国訳釈經部七・六五）には「救無く歸無く所依止無く、生死の險難惡道に流轉」する人と論断されています。大聖人様は御講聞書（一八四三頁）に「法華經より外の一切衆生は、何に高貴の人なりとも餓鬼道の衆生なり」とさえ申されており、又、日女御前御返事（一二三三頁）には「設ひ父母子をうみて眼・耳ありとも、物を教ふる師なくば畜生の眼・耳にてこそあらましか。」と、信心のない人は、たとえ姿、形は人間のような格好をしていても、その本性は畜生であり単なる哺乳動物にすぎないと申されています。又、「不信は人に非ず、菩薩に非ず」との御指南です。

第二には、御信徒の中にも、常に寺院に参詣する人と、参詣しない人があると言う事。日蓮正宗の寺院は大聖人様の仏法僧の三宝の在す所、「一切衆生の歸依所」であり、そこは又「功德の福田」であり、「修行の道場」です。大聖人様は四条金吾殿御返事（一五〇二頁）に「今此の所も此くの如し。仏菩薩の住み給ふ功德聚の砌なり。（中略）毎年度々の御参詣には、無始の罪障も定めて今生一世に消滅すべきか。弥はげむべし、はげむべし。」と申されています。「所属寺院への参詣と総本山登山を忘れない法華講員」でなければなりません。寺院に参詣しない人々について、新池御書（一四三七頁）に「皆人の此の経を信じ始むる時は信心有る様に見え候が、中程は信心もよはく、僧をも恭敬せず、供養をもなさず、これ恐るべし、恐るべし。」と説かれています。中には、自分が参詣しないまでも、相手にまで行く必要がない等と教唆（他人をそそのかして犯罪実行の決意を生じさせる）する人がいますが、こう言う人は、大聖人の下山御消息の御指南によれば、自ら火をつけずとも、妙法の寺に、大聖人のお寺に火をつけて焼き放つに等しいと言うことを知るべきであります。

第三には、よく僧坊に参詣する人の中にも、勤行を励行（決めたこと、決められたことをその通りに実行すること）する人と、貫く事の出来ない人があるという事

本因妙抄（一六七九頁）に「信心強盛にして唯余念無く南無妙法蓮華經と唱へ奉れば凡身即ち仏身なり」と申され、また妙密上人御消息（九六七頁）には「経のまゝに唱ふればまがれる心なし。」と仰せられている如く、毎日の勤行を貫く人は「規則正しい、リズムに乗った生活が出来る人」になります。そして、身心共に磨かれて、心も身体も清浄な人へと変っていきます。特に女性の方々に申しますと、毎日の勤行を貫く人は心の美しい落着きのある人となります。又、男性の方は氣骨のある、信念のすわった威厳のある人となる事ができるのです。総じて、勤行を貫く人は諸難にも、さまざまな困難にも負けない人となる事ができるのです。そして、信心の上においても、職場においても、家庭にあっても信頼される人となります。しかし逆に、勤行をしない人、信行具足の題目のない人に対して、曾谷入道殿御返事（一一八八頁）には「されば題目をは

なれて法華經の心を尋ぬる者は、猿をはなれて肝をたづねしはかなき亀なり。山林をすて、菓を大海の辺にもとめし猿猴なり。はかなしはかなし。(妙法蓮華經の題目は一代聖教の大綱であり法華經の体・心であるから、題目の有する甚深の心を忘れ離れて法華經を求めても、猿を離れて肝を尋ねたはかなき亀や山林を捨てて木の実を海に求めた猿のようなものである、むなしなことである)と仰せです。即ち、実践のともなわれない信仰は、身口意・三業の信とは言えないとの仰せです。つまり、私たちが尊い仏性を持っていたても、勤行をしなければ開き顯すことは出来ないとの仰せであります。

第四には「よく法を聴く人を以って善と為し、不聴聞の人を不善と為す」と言う事

大聖人様は新池御書(一四五七頁)に「何としても此の經の心をしれる僧に近づき、弘法の道理を聴聞して信心の歩みを運ぶべし。」と申されています。私たちには一闍浮提第一の大御本尊があります。そして、血脈付法の御法主上人の御指南にも触れることが出来ます。そして、大聖人様の仏法を住職より聞くこともできます。それ故、法華講の皆様は大聖人様の三宝の恩を忘れず、時の御法主上人猊下に感謝し、そして御法門の研鑽を忘れない法華講員となつて下さい。月々の機関誌もみんなで読み合つて戴きたいと思ひます。どうしても解らないところは住職に聞いてください。大聖人は松野殿御返事(一〇四七頁)に「何に賤しき者なりとも、少し我より勝れて智慧ある人には、此の經のいはれを問ひ尋ね給ふべし。(中略)法華經の一偈一句をも説かん者をば仏を敬うが如くすべし」と言われています。

反対に聴く耳を持たない人、増上慢の人、また大聖人様の仏法を御書や猊下の御指南に依らないで、人の噂やねつ造された情報で勉強する人は、法華經の化城喻品(開結・三三二頁)に「仏に従いて法を聞かずして、常に不善の事を行じ、色力及び智慧、斯等皆減少す」と説かれる如く、信心の力も失せ、肉体的にも精神的にも、智慧や、頭腦の働きの上においても、その力、エネルギーを喪失し、必ず落ちぶれ、草臥れ、行き詰まり、やがて悲しい、寂しい人生の終末を迎えるのであります 斯等

第五、第六の徳目は、よく法を聴聞する人の中にも、至心に隨喜の心を持つて聴き、自らの信心の姿勢に当てはめて、反省懺悔、そして、よくその趣旨、本義を弁える人、発心と精進を重ねる人を善とし、至心(まことの心。誠実な心)ならざる人、即ち聞きつ放しで、その実践を思わざる人、発心の糧と出来ない人を不善なすのであります。

一念三千法門(一〇九頁)に「一念も隨喜する時即身成仏す」と申されており、逆に秋元御書(一四四七頁)には「信ずる日はあれども捨つる月もあり。是は水の漏るが如し」と信心の姿を器に譬えて、水の漏れない、謗法の汚れない、また破失する事のない堅固な完浄の信心を促されています。入信した時の初心を忘れず、常に発心と人間性の向上、鍊磨をめざす人となつていく事が大切なことであります。

第七に大切な徳目は「如説修行の人を以って善となし、説の如く行ぜざるを以って不

善と為す」という事

大聖人様は如説修行抄（六七一頁）に「所詮仏法を修行せんには人の言を用ふべからず、只仰いで仏の金言をまぼるべきなり。」と仰せのように、日蓮大聖人様の弟子檀那として、御本尊様に常随給仕し、大聖人様の御指南、仏の金言、極説に随う人、そして猊下の御指南に随う人、つまり信心の筋目を正す本流正義の人とならなければなりません。しかし、それに引きかえ、人師の説を本として仏に背き、人の言葉や噂に紛動される人がいますが、このような己義や我見を構える人は「如説修行の人」とは言わないのであります。即ち、大聖人は衆生身心御書（一二二二頁）に「麻の中のものもぎ・つゝの中のものなは・よき人にむつづぶもの、なにとなければ心もふるまひも言もなをしくなるなり。」と仰せのように、正しい御本尊のもとに、正しい教義にのっとり、正師の教導を得て、また多くの立派な信心の先輩を見習って修行し、折伏弘通に精進して行くのを「如説修行の信心」と言うのです。大勢の中には、「人からちよつと注意された」また「悪口を言われた」「冷たくあしらわれた」「厳しく叱られた」と言つては、「もうお寺に行きたくない」「会合にも出たくない」「面白くない」等と言つて、子供の登校拒否の様に、「参詣拒否」する人がいます。しかし、信心は唯一人で孤立してするものではありません。そして、正信会や創価学会員のように「憎しみ」や「怨念」で、「恨み」「辛み」でする信心を、大聖人様が「良き檀那」「如説修行の人」とお褒めになるわけがありません。

最後に第八番目の最も大事な菩薩の徳目は、如説修行の中にも「折伏を行じて多くの人々を利益せしめる人を最上最善と為し、折伏を行ぜず、自らの安樂を樂う人を善と為さず」という事。

聖愚問答抄（四〇三頁）に「只折伏を行じて力あらば威勢を以て謗法をくだき、又法門を以ても邪義を責めよ」と仰せであり、また守護国家論（一一五頁）には「在家の諸人別の智行無しと雖も、謗法の者を対治する功德に依つて生死を離るべきなり。」と諭されています。即ち大聖人様は広宣流布の大願に生きる折伏の息吹に溢れた法華講、燃えたつ様な自行化他の信心に立つ折伏の人を「此の人を以って人中の宝、最勝、最上、最善の人」と御照覧遊ばされるのです。

涅槃經の梵行品に「折伏を行じて多くの人々を利益し、安樂を得さしめる人を最善と為す」（国訳一切經涅槃部一―三一二）という經文の如く、釈尊は折伏を行ずる人を「人天の中に於いて、最勝の人」と為し、天台大師は摩訶止観に「人師の国宝」といい、伝教大師は「道心あるの仏子、西には菩薩と称し東には君子と号す」と説かれているのでありますが、閻浮提第一の正法を信受して、その第一の大法を弘める皆様方は「善根第一の人」であると仏さまは申されているのでありますから、唱題を根本にいいよの御精進をお願い致します。以上。

（令和七年五月度・御経日の砌）